

開催地名：兵庫県西脇市	
開催日時	令和3年11月12日（金） 14:00～15:30 令和3年11月13日（土） 10:00～12:00
開催場所	1日目：西脇市役所 大会議室 2日目：西脇市市民交流施設 つながるスタジオ
語り部	芳賀タエ子 （宮城県南三陸町）
参加者	1日目：市職員 50名 2日目：自主防災組織 35名
開催経緯	自主防災会の組織率は100%となっている一方、自主防災会長はすべて男性である。また近年大きな災害が起こっていないため、若年層を中心に危機意識が低下している。女性の視点に立った災害対応や多様な視点の重要性を知り、防災意識の高揚や自主防災組織の活性化を図りたい。
内容	<p>(1) 震災発生時の様子</p> <p>震災当時、私のいた南三陸町は2011年に合併統合したばかりで、さあこれから観光業で街を売り出していこうというとき、あの大地震が起こった。当時は組合でデスク事務をしていたが、高台まで命からがら逃げだした。多くの人々が流されるのを間近で見っていた。チリ地震による津波被害を経て建てられた防波堤は見事に超えられてしまった。もう戻れないということが分かり、皆が不安やストレスで大変だった。海岸線の堤防を3倍も4倍も超える津波という想定外のことが起きたが、犠牲者は主に内陸部の方が多かった。これは、普段の避難訓練で、沿岸部側の人は真っ先に避難、内陸部の方は炊き出しなどをおこなうという指導がなされていたからだ。津波が防波堤を越えたことを確認できなかった内陸部の方は、避難はしたものの家財などが気になり、また戻ってしまったのだ。私の家族は事前に話し合いで集合場所を決めてはいたが、高台に上り、ある程度波が引いた後、我に返った時には家族はいなかった。10年たった現在でも行方不明者は多数に上り、毎月1回は捜索活動が行われている。</p> <p>(2) 避難所にて</p> <p>避難所ではボランティアや多くの方から支援を受け、更に別の避難所への2次避難や3次避難の支援もしてもらった。自分たちは、一人では生きられないということを強く感じた。着の身着のまま歯も磨けず、風呂にも入れず、じっと耐えながら日々を過ごした。自衛隊の方が来てくれて簡易的に水をつなぐことで風呂に入れたとき、生きられるということを実感した。避難所ではプライバシーが保証されない。排泄もままならないよう</p>

	<p>な衛生環境で、多くの人がストレスを抱え続けることを、市役所や自主防災組織の担い手は認識していなくてはならない。</p> <p>(3) 大震災から得た教訓</p> <p>多くのボランティアや若い人の協力によって復興が進んだ。石碑が立ち、震災伝承館も建てられた。自然災害は好むと好まざるとやってくる。自分の命を守る方法という視点で伝承活動を行っている。例えば水の重要性を伝えたい。水は衛生管理にも使えるし、食べるものがなくても水さえあれば何とか2、3日は生きられる。持病がある方であれば、薬の処方箋を常に鞆に入れておけば、病院ですぐ自分の薬を処方してもらえる。女性であれば生理用品など、必要なものは常に持ち歩くことで「防災力を高める」姿勢が大事である。実際、私も常にペットボトルを持ち歩いている。また、ライフラインがストップしたら全て人の手で行わなければならない。振り分け作業、支援物資の輸送、炊き出し、自分にできることは何でもいいからやる姿勢を持ってほしい。子供や高齢者のおむつなど、必要だが声を上げにくいものはあるだろう。しかし非常時にこそ、これが欲しい、こうあってほしいという声を上げていくことが大事である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>女性の視点を計画策定段階で組み込むためにも、防災安全課に女性職員が配属されていないことは問題だと感じた。一般職だけでなく、管理監督職向けにも同様の研修を実施し、庁内全体として、防災安全課に女性が重要だという風潮が出てきてほしい。</p> <p>来年度には、ぜひ防災安全課に女性職員（できれば管理監督職）を配置してもらいたい。</p>